

# *Bhagavadgītā* シュリーダラ註試訳

— *Bhagavadgītā* 11 章 1-25 偈 —

眞鍋 智裕, 佐藤 隆大, 大木 舞

## 1. 導入

本稿は、聖典 *Bhagavadgītā* (BhG) の第 11 章 (本稿では 1-25 偈まで) を、シュリーダラ・スヴァーミン (Śrīdhara Svāmin, ca. 1350-1450)<sup>1</sup> の註釈 *Subodhinī* (Su) とともに訳出するものである。現在早稲田大学においては、インド仏教の研究者が多数を占めており、バラモン・ヒンドゥー教系の研究者は少ない。その中で、バラモン・ヒンドゥー教系思想を専攻している眞鍋、佐藤とヒンドゥー教美術を専攻している大木の三人で BhG の読書会を開くことになった。本稿はその読書会の成果の一部である。BhG 11 章を選んだ経緯、またシュリーダラの Su を註釈として選んだ経緯は以下のようなものである。

(文責：眞鍋)

### 1. 1. BhG 11 章と「ヴィシュヴァ・ルーパ」の図像について

インド美術において、「ヴィシュヴァ・ルーパ」(Viśvarūpa) と題される一連の図像が存在する。一般にヴィシュヌ (Viṣṇu) 神の図像を指し、その作例は主に (1) 古代・中世の彫刻, (2) 近代の細密画, (3) 現代のイラスト類に大別され、大部分が BhG 11 章を典拠とすると考えられている。BhG 11 章は、クリシュナ (Kṛṣṇa) 神がアルジュナ (Arjuna) に対し超越的な姿を顕現させる場面であり、その図像を絵画や彫刻として造形化する際に重要な資料となるであろう図像に関する記述を多く含む。

例えば、クリシュナ神の姿に関しては、多面多臂で絢爛豪華な装飾を身に纏い、多くの武器を持つこと（10 偈・11 偈）や、月と太陽を眼とし、燃火を口とすること（19 偈）、世界をその身体とし（13 偈）、その内部には神々や生類、聖仙や蛇、ブラフマー（Brahmā）神が存在すること（15 偈）などが言及される。ここで言及されるクリシュナ神の姿の特徴は、多面多臂であること、世界をその身体とすることである。また、クリシュナ神の超越的な姿を見た者達に関しては、三界は恐れ（20 偈）、或る者達は恐れて合掌し、聖仙と成就者は讃えること（21 偈）、神々と祖霊達等は驚嘆して見つめること（22 偈）、世間の人々と同様に



アルジュナも慄いていること（23 偈）などが言及される。造形化に際しては、多面多臂で世界をその身体とするクリシュナ神の姿のみが表されることもあれば<sup>2</sup>、その周囲に合掌する者達の群れを配して表されることもある<sup>3</sup>。

これらの特徴を持つ「ヴィシュヴァ・ルーパ」の図像の機能としては、まず礼拝像であること、次に瞑想の際に用いられることの二点が考えられる<sup>4</sup>。

このように、BhG 11 章は、その記述に基づき多くの図像が生み出されるという点で、重要性があるといえよう。

以上のような事情で、読書会に際し BhG 11 章を選んだ。

（文責：大木）

図版：市販のポストカード、2016 年に筆者が購入。Ranjan によると、カレンダーの挿絵であったこの図像は、1975 年頃から現代に至るまで広く流布しているという<sup>5</sup>。

## 1. 2. シュリーダラ・スヴァーミンについて<sup>6</sup>

シュリーダラ・スヴァーミンはオリッサ州に生まれ、インドにおける哲学学派のうち、ヴェーダーンタ学派内の不二一元論 (Advaita) 学派に属していたと言われている。そして彼は、ヴィシュヌ (Viṣṇu) 神、特にヴィシュヌ神の化身 (avatāra) の一つであるヌリシンハ (Nṛsimha) 神の崇拝者であったことが指摘されている。しかし、彼の素性について、その他多くのことは分かっていない。

彼には Su の他に、少なくとも *Viṣṇu Purāṇa* に対する註釈 *Ātmaprakāśa* と *Bhāgavata Purāṇa* (BhP) に対する註釈 *Bhāvārthadīpikā* (BhAD) という著作が残されている。特に BhAD は BhP 全編に対する現存最古の註釈であり、BhP 研究だけではなく、ヴィシュヌ教思想史のうえでも重要である。彼の BhAD には不二一元論学派の要素も当然含まれているが、ヴェーダーンタ学派内の二元論 (Dvaita) 学派の開祖マドゥヴァ (Madhva, ca. 1238-1317<sup>7</sup>) からの影響があることが指摘されている。また、特に後世のベンガル・ヴィシュヌ教 (Gauḍīya Vaiṣṇava) との関連性が強いことも指摘されている。そのため、ベンガル・ヴィシュヌ教に与えた影響を主題とした研究が今までになされてきており<sup>8</sup>、その結果、シュリーダラの思想は不二一元論学派の非有神論的傾向ではなく、ベンガル・ヴィシュヌ教に繋がる有神論的傾向が強いことが判明している。しかし、Venkatkrishnan 博士も指摘しているように<sup>9</sup>、まだまだシュリーダラ研究は端緒を開いたばかりである。

以下では、数ある BhG の註釈書のうち、本稿においてシュリーダラの Su を取り挙げた理由を二点述べる。まず、筆者個人の研究に関連する点を挙げる。筆者はここしばらく、不二一元論学派に属するマドゥスーダナ・サラスヴァティー (Madhusūdana Sarasvatī, ca. 16th) の有神論思想の解明を研究課題としている。マドゥスーダナも、冒頭三偈に対してのみであるが BhP に註釈を著しており、また BhG に対する大部の註釈 *Gūḍhārthadīpikā* (GAD) を著している。この二著作は各々、シュリーダラの BhAD と Su の影響を受けており、ある場合にはシュリーダラ説を採り入れ、ある場合にはシュリーダラ説を排斥している<sup>10</sup>。このように、マドゥスーダナの有神論思想を解明するためにもシュリーダラの有神論思想の解明は必須である。しかし、現況では BhAD に比して Su の研究は進んでいない。以上のような事情から、シュリーダラの有神論

思想解明の一助として、ここにシュリーダラの Su を取り挙げ、試訳する次第である。

以上のように、第一点は筆者一人の個人的な事情によるものであったが、もう一点は、BhG 読解に際しての Su の有用性によるものである。BhG には多くの註釈書が存在するが、例えば不二一元論学派の開祖であるシャンカラ (Śaṅkara, ca. -756-772-<sup>11</sup>) やマドゥスーダナの註釈書は、BhG 自体の字義説明だけでなく、自身の学説を敷衍して述べることが多い。ことは不二一元論学派の註釈書だけではなく、他学派の註釈にも同様のことが指摘できる。また逆に、註釈としては短すぎるようなものも存在する。その点 Su は基本的には BhG の逐語的註釈であり、BhG そのものを読むに当たって非常に読みやすく、参考にし易い。もちろんシュリーダラ自身の思想が表面に出ている箇所もある（そうでなければ、シュリーダラの思想解明の参考にならない）が、他の註釈よりは少ない。

以上のような事情から、本稿では BhG を読むに際して Su を使用し、その試訳を掲載することとする。

(文責：眞鍋)

## 2. *Subodhinī on Bhagavadgītā* 11 章試訳

BhG と Su の試訳に際して、眞鍋が大まかに試訳を作成し、その試訳を眞鍋、佐藤、大木とで検討していった<sup>12</sup>。また、テキスト校訂に関して Su on BhG 11.1-9 を大木が、on BhG 11.10-20 を佐藤が、on BhG 11.21-25 を眞鍋が基本的に校訂を担当し、更に各々のテキスト校訂を検討する、という形を採った。なお、テキスト校訂の凡例は以下のようなものである。

### 凡例

- ・本来は写本にもとづいてテキストを校訂すべきであるが、写本を入手出来なかったため、諸刊本の読みにもとづいて校訂を行った。使用した諸刊本については、本稿末の参考文献一覧を参照。
- ・サンディの正誤は煩雑になるため逐一註記しない。該当箇所は

註記なく訂正した。

・異読の正誤は、基本的に文脈上、一番文意の通るものを採用した。また、シャンカラの註釈やマドゥスーダナ・サラスヴァティ一の註釈を参照した場合もある。その際には註記した。

・文脈によって、何れの刊本にも従わなかった箇所があるが、その場合には conjecture (conj.) として示した。

・異読のある箇所は、採用した読みを " ] " の左項に掲載し、異読を右項に提示してある。

## Text と試訳

vibhūtivaibhavaṃ procya kṛpayā parayā hariḥ /  
didṛkṣor arjunasyātha viśvarūpam adarśayat //

ハリ [神] (クリシュナ) は、多大なる慈しみによって示現の偉大さを述べてから、それから、[それを] 見たいと願っているアルジュナに一切の姿を示した。

pūrvādhyāyānte "viṣṭabhyāham idaṃ kṛtsnam ekāṃśena sthito jagat"<sup>13</sup> iti viśvātmakam pārameśvaram rūpam upakṣiptam. taddidṛkṣuḥ pūrvoktam abhinandann **arjuna uvāca – madanugrahāyeti caturbhiḥ**<sup>14</sup>.

先の章の最後に、「私はこの全ての世界を、一部によって支えて住す」と、一切を本性とする、最高神に関する姿が説示された。先に述べられたことを称えつつ、それ（最高神に関する姿）を見たいと願うアルジュナは、四 [偈] によって述べた。私への好意のために、と。

arjuna uvāca –  
madanugrahāya paramaṃ guhyam adhyātmasaṃjñitam /  
yat tvayoktam vacas tena moho 'yaṃ vigato mama //1//  
アルジュナは述べた。

私への好意のために、貴方によって述べられた、最高の秘説である「アートマンに関すること」と呼ばれる言葉によって、私のこの迷妄は去った。

mamānugrahāya śokanivṛttaye, **paramaṃ** paramārthaniṣṭhaṃ **guhyam**

gopyam api **adhyātmam** iti **saṃjñitam** ātmānātmavivekaviṣayaṃ **yat tvayoktaṃ vacaḥ** "aśocyān anvaśocas tvam"<sup>15</sup> ityādi śaṣṭhādhyāparyantaṃ yad vākyam, **tena mamāyaṃ mohah** "ahaṃ hantaite hanyante" ityādilaṅkaṇo bhramo **vigato** vinaṣṭaḥ. ātmanaḥ kartṛtvādyabhāvokteḥ //1//

私への好意のために、即ち〔私の〕憂いの消滅のために、最高の、即ち最高の目的（解脱）に至る秘説、即ち隠されたものだけでも、「アートマンに関すること」と呼ばれるもの、即ちアートマンと非アートマンの識別を対境とする、貴方によって述べられた言葉、即ち「貴方は嘆かれるべきでない諸の人たちについて嘆く」ということから第六章に至るまでの文章、それによって、私のこの迷妄は、即ち「私は殺害者であり、彼らは殺される」等の特徴とする迷乱は、去った、即ち消滅した。アートマンは行為者であること等がないと述べられているから。

kiṃ ca – **bhavāpyayāv** iti.

更に、生成と消滅が、と。

bhavāpyayau hi bhūtānāṃ śrutau vistaraśo mayā /  
tvattaḥ kamalapatrākṣa mähātmyam api cāvvyayam //2//

実に、私によって、生類の生成と消滅が詳細に聞かれた。貴方から、蓮弁の〔ような〕眼をした方よ、また無尽蔵の偉大さが〔聞かれた〕。

**bhūtānāṃ bhavāpyayau** sṛṣṭipralayau **tvattaḥ** sakāśād eva bhavata iti **śrutau mayā** "ahaṃ kṛtsnasya jagataḥ prabhavaḥ pralayas tathā"<sup>16</sup> ityādau **vistaraśaḥ** punaḥ punaḥ. kamalapatre iva suprasanne viśāle akṣiṇī yasya tava saḥ, he **kamalapatrākṣa**<sup>17</sup>. **mähātmyam api cāvvyayam** akṣayaṃ śrutam.

viśvasṛṣṭyādikartṛtve 'pi sarvaniyanṭṛtve 'pi<sup>18</sup> śubhāśubhakarmakārayitṛtve 'pi bandhamokṣādivicitraphaladātṛtve 'py avikārāvaiśamyāsaṅgaudāsīnyādilaṅkaṇam aparimitaṃ mahattvaṃ ca<sup>19</sup> śrutam – "avyaktaṃ vyaktim āpannaṃ manyante"<sup>20</sup> "mayā tatam idaṃ sarvam"<sup>21</sup> "na ca mām tāni karmāṇi nibadhnanti"<sup>22</sup> "samo 'haṃ sarvabhūteṣu"<sup>23</sup> ityādinā. atas tvatparatantratvād api jīvanām ahaṃ kartetyādir madīyo moho vigata iti bhāvaḥ //2//

生類の生成と消滅、即ち創出と帰滅が、当に貴方から、とは、汝から、ということであり、「同様に、私は全世界の本源であり、帰滅である」

等ということに関して、詳細に、即ち何度も何度も、私によって聞かれた。蓮華の花弁のようなとても澄んだ、大きな〔両〕眼が貴方にある、〔その貴方が蓮弁のような眼をしており、〕おお、蓮弁の〔ような〕眼をした方よ、また無尽蔵の、即ち滅すことのない偉大さが聞かれた。

〔貴方は〕一切の創出等の行為主体であり、一切の御者であり、吉祥な、或いは不吉な行為を引き起こす者であり、束縛と解脱等という様々な果報を与える者であるけれども、「〔知性を持たない人々は、〕未顕現な〔私〕を、顕現を得ていると考える」、「この一切は、私によって覆われている」、「そして、それらの諸行為は私を束縛しない」、「私は一切の生類に対して平等である」等によって、〔貴方の〕不変異、無相違、無執着、無関心であること等を特徴とする、計り知れない偉大性が聞かれた。従って、諸の命我は貴方に従属するものであることから、私は行為主体である、等という私の迷妄は去った、ということである。

kim ca – evam iti.

更に、その通りである、と。

evam etad yathāttha tvam ātmānaṃ parameśvara /  
draṣṭum icchāmi te rūpaṃ aiśvaraṃ puruṣottama //3//

貴方が自身のことを述べられた通りである。最高神（クリシュナ）よ。〔私は〕貴方の神的な姿を見たい。至高のプルシャ（クリシュナ）よ。

"bhavāpyayau hi bhūtānām"<sup>24</sup> ityādi mayā śrutam. **yathā cedānīm ātmānaṃ tvam āttha** "viṣṭabhyāham idaṃ kṛtsnam"<sup>25</sup> ity evaṃ kathayasi, he **parameśvara, evam etat.** atrāpy aviśvāso mama nāstīty arthaḥ. tathāpi he **puruṣottama tavaiśvaraṃ** jñānaiśvaryaśaktibalavīryatejobhiḥ saṃpannaṃ tvadrūpaṃ kautūhalād ahaṃ **draṣṭum icchāmi** //3//

「何故なら、生類の生起と帰滅が」等ということが私によって聞かれた。そして、今、自身のことを貴方が述べられたように、即ち、「私はこの全ての〔世界〕を、〔一部によって〕支えて〔住す〕」と、このように〔貴方は〕語られた。おお、最高神よ、それはその通りである。この点に関しても、私に疑念は存在しない、という意味である。そのようであっても、おお、至高のプルシャよ、貴方の神的な、即ち、知・主宰性・

能力・強さ・勇敢さ・威光を具えた、そのような姿を、熱烈な願いから、私は見たい。

na cāhaṃ draṣṭuṃ icchāmīty etāvataiva tvayā tadrūpaṃ darśayitavyam. kiṃ tarhi – **manyasa** iti.

しかし、私が見たい、というこの限りによって、貴方によってその（貴方の）姿が示されるべきではない。その場合、どうしてであるのか、  
[というので答える。] 考えられる、と。

manyase yadi tac chakyaṃ mayā draṣṭuṃ iti prabho /  
yogeśvara tato me tvam darśayātmānam avyayam //4//

もしも、[貴方が] 私によってそれが見られることが出来る、と考えられるなら、輝く者よ、それ故、私に、無尽蔵の貴方ご自身を示して下さい、ヨーガの主宰神（クリシュナ）よ。

yogina eva **yogaḥ**, teṣāṃ **īśvara**. mayārjunena **tadrūpaṃ draṣṭuṃ śakyam iti yadi manyase, tatas** tarhi tadrūpavantam **ātmānam avyayaṃ** nityaṃ mama **darśaya** //4//

ヨーガ行者達こそが、ヨーガに従事するもの達（yogaḥ）であって、彼らの主宰神よ。私によって、即ちアルジュナによって、その姿が見られることが出来る、ともしも [貴方が] 考えられるなら、それ故、即ちその場合、その姿を有する、無尽蔵の、即ち常住なご自身を、私に示して下さい。

evaṃ prārthitaḥ sann atyadbhutaṃ rūpaṃ darśayiṣyan sāvadhāno bhavety evam arjunam abhimukhīkaroti – **śrībhagavān uvāca** – **paśyati** caturbhiḥ<sup>26</sup>.

以上のように願われているので、非常に素晴らしい姿を示しつつ、[お前は] 注意深くあれ、とこのように、聖なる主は述べた。見よ、という四つの [頌] によって、[主は] アルジュナに言った。

śrībhagavān uvāca –

paśya me pārtha rūpāni śataśo 'tha sahasraśaḥ /  
nānāvīdhāni divyāni nānāvārṇākṛtīni ca //5//

聖なる主は述べた。

プリターの息子（アルジュナ）よ、私の、何百、または何千もの



多様な種類の、神的な諸の姿を見よ。そして、多様な色と形を有する [私の諸の姿] を [見よ]。

rūpasyaikatve 'pi nānāvidhatvād rūpāṅīti bahuvacanam. aparimitāny anekaparakārāṅī **divyāny** alaukikāṅī mama **rūpāṅī paśya. varṇāḥ** śuklakṛṣṇādayaḥ. **ākṛtayo** 'vayavasamṇiveśaviśeṣāḥ. **nānāneke varṇā**<sup>27</sup> **ākṛtayaś ca yeṣāṃ tāni nānāvarṇākṛtīni ca**<sup>28</sup> //5//

姿は一つであっても、多様な種類があるので、諸の姿を、という複数形の語がある。計り知れない、多くの形態を有する、神的な、即ち非世間的な、私の諸の姿を見よ。諸の色とは、白や黒等である。諸の形とは、部分という特殊性である。そして、或るものに、多様な、即ち多くの色と形がある場合、その多様な色と形を有する [姿を見よ、ということである]。

tāny evāha – **paśyati**.

他ならぬそれら（諸の姿）を述べる。見よ、と。

paśyādityān vasūn rudrān aśvinau marutas tathā /  
bahūny adṛṣṭapūrvāṅī paśyāścaryāṅī bhārata //6//

アーディティヤ [神群]、ヴァス [神群]、ルドラ [神群]、アシュヴィン [双神]、マルト [神群] を見よ。同様に、多くの、今までに見られたことのない、諸の驚嘆すべきものを見よ、バラタ族の者（アルジュナ）よ。

**ādityādīn** mama dehe **paśya. maruta** ekonapañcāśaddevaviśeṣān. **adṛṣṭapūrvāṅī** tvayā vānyena vā pūrvam adṛṣṭāṅī rūpāṅī. **āścaryāṅy** atyadbhutāni //6//

私の身体において、アーディティヤ等を見よ、[ということである]。マルト [神群] を、とは、四十九の神を限定とするものを、ということである。今までに見られたことのないものを、とは、貴方によって、或いは、他のものによって、以前に見られたことのない姿を、ということである。驚嘆すべきものを、とは、素晴らしいものを、ということである。

kiṃ ca – **iheti**.

更に、ここに、と。

ihaikasthaṃ jagat kṛtsnaṃ paśyādya sacarācaram /

mama dehe guḍākeśa yac cānyad draṣṭum icchasi //7//

今日、この私の身体において、一つに集っている、動・不動のもの  
を伴う全ての世界を見よ。髪濃い者よ。そして、見たいと願  
う他のものを [見よ]。

tatra tatra paribhramatā varṣakoṭibhir api draṣṭum aśakyam **kṛtsnaṃ** api  
**carācarasahitaṃ jagad ihāsmi mama dehe** 'vayavarūpeṇaikatraiva sthitam  
**adyādhunaiva paśya. yac cānyaj jagadāśrayabhūtaṃ kāraṇasvarūpam, jagataś**  
**cāvasthāviśeṣādikam, jayaparājayādikaṃ**<sup>29</sup> ca yad apy **anyad draṣṭum icchasi**  
tat sarvaṃ paśya //7//

あちこちを彷徨っている者によって、千万年かかっても見られ得ない、  
全てもの、動・不動のものを伴う世界を、ここで、即ちここにおいて、  
[つまり] 私の身体において、部分というあり方で、一つのもののみ  
あるものを、今日、即ち今すぐに、[貴方は] 見よ。そして、他のもの、  
即ち世界の拠り所である、[世界の] 原因を本質とするもの、また、世  
界の特殊な状態等、また、勝利と敗北等という、見たいと願う他のもの  
をも、全て [貴方は] 見よ。

yad uktam arjunena – "manyase yadi tac chakyam"<sup>30</sup> iti tatrāha – **na tv** iti.

アルジュナによって以下のように述べられたこと、[即ち]「それが見ら  
れることが出来る、と考えられるなら」というこの点に対して答える。  
しかし、ない、と。

na tu mām śakyase draṣṭum anenaiva svacakṣuṣā /

divyaṃ dadāmi te cakṣuḥ paśya me yogam aiśvaram //8//

しかし、他ならぬその [貴方は] 自身の眼によっては、私を見る  
ことは出来ない。貴方に天眼を授ける。私の神的なヨーガを見よ。

**anenaiva tu svīyena carmacakṣuṣā mām draṣṭum na śakyase śakto na**  
**bhaviṣyasi. ato 'haṃ divyaṃ alaukikaṃ jñānātmakaṃ cakṣus tubhyaṃ**  
**dadāmi. mamaiśvaram asādhāraṇaṃ yogam** yuktim aghaṭitaghaṭanāsāma-  
rthyam **paśya** //8//

しかし、他ならぬその、[貴方] 自身の肉眼によって、私を見ることは

出来ない、即ち [貴方は] 能力を持つ者とならないだろう。従って、私は神に属する、即ち非世間的な、知を本質とする眼を、貴方に授ける。私の、神的な、即ち特別なヨーガ、即ち生じないものを生じさせる能力である特性を見よ [という意味である]。

evam uktvā bhagavān arjunāya rūpaṃ darśitavān. tac ca rūpaṃ dṛṣṭvārjunaḥ śrīkr̥ṣṇaṃ vijñāpitavān itīmam artham **evam uktvetyādibhiḥ ṣaḍbhiḥ śloka**ir dhṛtarāṣṭraṃ prati saṃjaya uvāca<sup>31</sup> – **evam** iti.

以上のように述べてから、主は、アルジュナに、姿を示された。そして、その姿を見てから、アルジュナは、聖クリシュナを識った、というこの意味内容を、以上のように述べてから、等の六偈によって、ドゥリタラーシュトラに対して、サンジャヤは語った。以上のように、と。

saṃjaya uvāca –

evam uktvā tato rājan mahāyogeśvaro hariḥ /  
darśayām āsa pārthāya paramaṃ rūpaṃ aiśvaram //9//

サンジャヤは語った。

以上のように述べてから、王よ、それから偉大なヨーガの主宰神であるハリ（クリシュナ）は、プリターの息子（アルジュナ）に、最高の神的な姿を見せた。

he **rājan** dhṛtarāṣṭra. mahāms cāsau yogeśvaraś ca **hariḥ paramam aiśvaram rūpaṃ** darśitavān //9//

おお、王よ、即ちドゥリタラーシュトラよ、彼は偉大で、かつヨーガの主宰神であり、[その] ハリは、最高の神的な姿を示した。

kathaṃ bhūtaṃ tad ity ata āha – **aneketi**.

それ（最高の神的な姿）はどのようなものであるのか、という [疑問があるので] それ故に述べる。多くの [口と目を持つ]、と。

anekavaktranayanam anekādbhutadarśanam /  
anekadivyaḥbharāṇaṃ divyānekodyatāyudham //10//  
divyamālyāambaradharaṃ divyagandhānulepanam /  
sarvāścaryamayaṃ devam anantaṃ viśvatomukham //11//

多くの口と目を持つ、多くの素晴らしい外観を持ち、多くの神的

な装飾品を有し、神的な多くの武器を振り上げた、神的な花環や衣服を着け、神的な香油を塗った<sup>32</sup>、一切の驚異から成る、全て [の方角] に [向けた] 顔を持つ、無限の神を [示した]。

**anekāni vaktrāṇi nayanāni** ca yasmimś tat. **anekānām adbhutānām darśanam** yasmimś tat. **anekāni divyābharaṇāni** yasmimś tat. **divyāny anekāny udyatāny āyudhāni** ca yasmimś tat //10//

kiṃ ca – **divyeti. divyāni mālyāny ambarāṇi**<sup>33</sup> ca dhārayatī<sup>34</sup> tathā. **divyo gandho** yasya tādrśam **anulepanam** yasya tat. **sarvāścaryamayam** anekāścaryaprāyam. **devam** dyotanātmakam. **anantam** aparicchinnam. **viśvataḥ** sarvato **mukhāni** yasmimś tat //11//

多くの口と目を持つ、その [神] を、である。多くの素晴らしいものの外観を持つ、その [神] を、である。多くの、神的な装飾品を有する、その [神] を、である。そして神的で多くの、振り上げられた武器を持つ、その [神] を、である。

更に、神的な、[以下を註釈する]。神的な花環と衣服を着ている、というように [解釈する]。同様に、神的な香りを持つ者のような油を塗った<sup>35</sup>、その [姿] を、である。一切の驚異から成る、とは、多くの驚異に満ちた、ということである。神を、とは、輝きを本性としているものを、ということである。無限の、とは、分断されていない、ということである。全てに、即ち、一切に [向けた] 諸の顔を持つその [神] を、ということである。

viśvarūpadīpter nirupamatvam āha – **divīti.**

一切を姿とするものの輝きが、比類ないものであることを述べる。天に、と。

divi sūryasahasrasya bhaved yugapad utthitā /

yadi bhāḥ sadrśī sā syād bhāsaḥ tasya mahātmanaḥ //12//

もしも、天に、同時に千の太陽の輝きが生起することとなるとすれば、それは、この偉大な方の輝きと同様なものであろう。

**divy ākāṣe. sūryasahasrasya yugapad utthitasya yadi yugapad utthitā bhāḥ** prabhā **bhavet** tarhi sā tadā **mahātmano** viśvarūpasya **bhāsaḥ** prabhāyāḥ kathaṃcit **sadrśī syāt.** nānyopamāstīty arthaḥ. tathābhūtam rūpaṃ darśayām

āseti pūrvenaivānvayah<sup>36</sup> //12//

天に、とは虚空に、ということである。もしも、同時に出現した千の太陽の輝き、即ち光輝が、同時に生起するとすれば、その場合、それは、それ故<sup>37</sup>偉大な方の、一切を姿とするものの輝き、即ち、光輝と幾分同様なものであろう。他の類比が存在することはない、という意味である。そのような姿を見せた、と、当に以前の〔偈<sup>38</sup>〕に続けられる。

tataḥ kiṃ vṛttam ity apekṣāyām āha saṃjayaḥ – tatreti.

それから何が起こったのか、ということに関して、サンジャヤは述べた。その、と。

tatraikasthaṃ jagat kṛtsnaṃ pravibhaktam anekadhā /  
apaśyad devadevasya śārīre pāṇḍavas tadā //13//

その時パンドウの息子（アルジュナ）は、神の中の神の身体において、多様に分かれている世界全体が、その一箇所に留まっているのを見た。

**anekadhā pravibhaktam nānāvibhāgenāvasthitam kṛtsnaṃ jagad devadevasya śārīre tadavayavatvenaikatraiva pṛthak pṛthag avasthitam<sup>39</sup> tadā pāṇḍavo 'rjuno 'paśyat //13//**

多様に分かれている、即ち種々の部分をもった状態にある全ての世界が、神の中の神の身体において、それ（神の身体）の部分であるので、〔神の身体という〕一箇所のみにおいて、それぞれ個別の状態にあるのを、その時パンドウの息子、即ちアルジュナは見た。

evaṃ dr̥ṣṭvā kiṃ kṛtavān ity ata āha – tata iti.

以上のように見てから、〔アルジュナは〕何を為したか、というので、それ故に述べた。それから、と。

tataḥ sa vismayāviṣṭo hr̥ṣṭaromā dhanamjayaḥ /  
praṇamya śirasā devaṃ kṛtāñjalir abhāṣata //14//

それから、驚愕に襲われた、総毛立った、その褒賞を勝ち取る者（アルジュナ）は、頭を下げ、神に敬礼し、合掌して語った。

**tato darśanānantaraṃ vismayenāviṣṭo vyāptaḥ san hr̥ṣṭāny utpulkitāni romāni yasya sa dhanamjayaḥ devaṃ tam eva śirasā praṇamya kṛtāñjalih**

samputīkṛtahasto bhūtvābhāṣatoktavān<sup>40</sup> //14//

それから、即ち見た直後、驚愕に襲われた、即ち満たされてあり、逆立った、即ち立った諸の体毛を持つ、その褒賞を勝ち取る者は、同じその神に、頭を下げて敬礼し、合掌して、即ち手を合わせた者となって、語った、即ち述べた。

bhāṣaṇam evāha – paśyāmīti saptadaśabhiḥ.

[アルジュナが] 語ったことこそを、見る、[以下の] 十七 [偈] によって述べる。

arjuna uvāca –

paśyāmi devāṃs tava deva dehe sarvāṃs tathā bhūtaviśeṣasamghān /  
brahmāṇam īsaṃ kamalāsanastham ṛṣīṃś ca sarvān uragāṃś ca divyān  
//15//

アルジュナは述べた。

神よ、貴方の身体の中に神々を私は見る。同様に、一切の種類の生類の集りを [私は見る]。[同様に] 一切の神的な諸聖仙と諸の蛇を [私は見る。同様に] 蓮華坐に坐した主宰者であるブラフマーを [私は見る]。

he deva tava dehe devān ādityādīn paśyāmi. tathā sarvān bhūtaviśeṣāṇāṃ jarāyujāṇḍajādīnāṃ samghāṃś ca. tathā divyān ṛṣīn vasiṣṭhādīn, uragāṃś ca takṣakādīn. tathā teṣāṃ<sup>41</sup> devādīnāṃ<sup>42</sup> īsaṃ svāmināṃ brahmāṇaṃ ca<sup>43</sup>. kathaṃ bhūtam. kamalāsanasthaṃ pṛthvīpadmakarṇikāyāṃ merau<sup>44</sup> sthitam. yad vā tvannābhipadmāsanastham //15//

おお神よ、貴方の身体の中に神々を、即ちアーディティヤ（太陽）等を私は見る。また同様に、一切の種類の生類の、胎生や卵生のもの等の集りを [私は見る]。同様に、神的な諸聖仙、即ちヴァシシュタ等と、諸の蛇を、即ちタクシャカ [蛇] 等を [私は見る]。また同様に、それら神等の主宰者、即ち主人であるブラフマーを [私は見る]。[それは] どのようなものであるのか。蓮華坐に坐す、即ち大地の蓮における台であるメールに坐す [者] を、である。或いは、貴方の臍 [から伸びる] 蓮華坐に坐す [者] を、である。

kiṃ ca – **aneketi**.

更に、多くの、と。

anekabāhūdaravaktranetraṃ paśyāmi tvāṃ sarvato 'nantarūpaṃ /  
nāntaṃ na madhyaṃ na punas tavādiṃ paśyāmi viśveśvara viśvarūpa<sup>45</sup>  
//16//

多くの腕と腹と口と眼を持つ、一切 [の方角] に、無限の姿を持つ  
貴方を私は見る。貴方の終りも、中間も、更に始めも私は見ない。  
一切の主宰神（クリシュナ）よ、一切の姿を持つもの（クリシュナ）よ<sup>46</sup>。

**anekāni bāhvādīni yasya tādrśaṃ tvāṃ<sup>47</sup> paśyāmi. anantāni rūpaṇi yasya  
taṃ tvāṃ sarvataḥ paśyāmi. tava tv antaṃ madhyam ādiṃ ca na paśyāmi**  
sarvagatatvāt //16//

多くの腕等を持つ、そのような貴方を私は見る。諸の無限の姿を持つ、  
その貴方を、一切 [の方角] に私は見る。しかし、貴方の終りも、中間  
も、始めも、私は見ない。[貴方は] 一切にあるものであるから。

kiṃ ca – **kirīṭinaṃ** iti.

更に、王冠をつけ、と。

kirīṭinaṃ gadināṃ cakriṇaṃ ca tejorāśiṃ sarvato dīptimantam /  
paśyāmi tvāṃ durnirikṣyaṃ samantād dīptānalārkadyutim aprameyam  
//17//

王冠をつけ、棍棒を持ち、円盤を持ち、一切 [の方角] への輝き  
を持つ威光の塊であり、見られ難く、輝いている火や太陽の [よ  
うな] 光輝を持ち、計り知れない貴方を、至るところに私は見る。

**kirīṭinaṃ<sup>48</sup> mukuṭavantaṃ gadināṃ gadāvantaṃ cakriṇaṃ cakravantaṃ ca<sup>49</sup>  
sarvato dīptimantaṃ tejaḥpuñjarūpaṃ ca<sup>50</sup> tathā durnirikṣyaṃ draṣṭum**  
aśakyam. tatra hetuḥ – **dīptayor analārkayor dyutir iva dyutis tejo yasya tam.**  
ata evāprameyam evambhūta iti niścetum aśakyam **tvāṃ samantataḥ  
paśyāmi** //17//

王冠をつけ、即ち王冠を有し、棍棒を持ち、即ち棍棒を有し、円盤を持  
ち、即ち円盤を有し、一切 [の方角] への輝きを持つ威光の集りをあり  
方とし、同様に、見られ難く、即ち見られることが出来ない [貴方を]

ということである。その点に対する理由は〔以下のような〕。輝いている火と太陽との光輝のような光輝，即ち威光を持つ，そのものを，ということである。それ故にこそ，計り知れない，即ち，このようなもの，と決定することが出来ない貴方を，至るところに私は見る。

yasmād evaṃ tavātarkyaṃ aiśvaryaṃ tasmāt – tvam iti.

以上のように，貴方の主宰性は不可思議なので，それ故に，貴方，と〔述べる〕。

tvam akṣaraṃ paraṃ veditavyaṃ tvam asya viśvasya paraṃ nidhānam  
/

tvam avyayaḥ śāśvatadharmagoptā<sup>51</sup> sanātanas tvam puruṣo mato me  
//18//

貴方は，不滅の者であり，知られるべき最高者である。貴方はこの一切の最高の拠所である。貴方は不変であり，永遠の教法の保護者である。貴方は永続するプルシャである，〔と〕私に考えられている。

tvam evākṣaraṃ paraṃ brahma. kathaṃ bhūtam. veditavyaṃ mumukṣubhir jñātavyam. tvam evāśya viśvasya paraṃ nidhānam. nidhīyate 'sminn iti nidhānaṃ prakṛṣṭa āśrayaḥ<sup>52</sup>. ata eva tvam avyayo nityaḥ. śāśvatasya nityasya dharmasya goptā pālakaḥ. sanātanaś cirantanaḥ puruṣaḥ, me mama mataḥ<sup>53</sup> sammato 'si //18//

当に貴方は，不滅の者であり，最高者であるブラフマンである。〔それは〕どのようなものか。知られるべき者，即ち解脱を望む者達によって理解されるべき者である。当に貴方は，この一切の最高の拠所である。それにおいて位置付けられるので拠所，即ち主要な寄る辺である。それ故にこそ，貴方は不変，即ち常住である。永遠の，即ち常住な教法の保護者，即ち維持者である。永続する，即ち古来存在するプルシャである。〔貴方は〕私に，即ち私にとって，〔以上のように〕考えられている，即ち承認されている。

kiṃ ca – anādīti.

更に，始まりを持たない，と。



anādimadhyāntam anantavīryam anantabāhum śaśisūryanetram /  
paśyāmi tvāṃ dīptahutāśavaktraṃ svatejasā viśvam idaṃ tapantam //19//  
始まり、中間、終りを持たず、無限の力を持ち、無数の腕を持ち、  
月と太陽を眼とし、輝いている供物を食べる者（燃火）を口とし、  
自身の威光によってこの一切を熱している貴方を、私は見る。

**anādimadhyāntam** utpattisthitipralayarahitam. **anantavīryam**<sup>54</sup> anantaṃ  
vīryaṃ prabhāvo yasya tam. **anantabāhum** anantā<sup>55</sup> bāhavo yasya tam.  
**śaśisūryau netre** yasya<sup>56</sup> tādr̥ṣaṃ **tvāṃ paśyāmi**. tathā **dīpto hutāśo** 'gnir  
**vaktreṣu** yasya tam. **svatejasedaṃ viśvaṃ tapantaṃ** saṃtāpayantaṃ  
**paśyāmi** //19//

始まり、中間、終りを持たない者を、とは、生起、存続、帰滅を欠いた者を、ということである。無限の力を持つ者を、とは、無限の力、即ち威力を持つ、その者を、ということである。無数の腕を持つ者を、とは、無数の腕を持つ、その者を、ということである。月と太陽という [両] 眼を持つ者、そのような貴方を私は見る。同様に、諸の口において輝いている、供物を食べる者、即ち火を持つ、その者を、ということである。自身の威光によって、この一切を熱している、即ち燃やしている者を私は見る。

kiṃ ca – dyāvāpṛthivyor iti.

更に、天と地の、と。

dyāvāpṛthivyor idaṃ antaraṃ hi vyāptaṃ tvayaikena diśāś ca sarvāḥ /  
dṛṣṭvādbhutaṃ rūpaṃ ugraṃ tavedaṃ lokatrayaṃ pravayathitaṃ  
mahātman //20//

実に、この天と地の間は、貴方一人によって満たされている。そして、一切の方角も [貴方一人によって満たされている]。偉大な方（クリシュナ）よ、三界は、貴方のこの見られたことのない、恐ろしい姿を見て、恐れている。

**dyāvāpṛthivyor idaṃ antaraṃ hi** antarikṣaṃ tvayaikena vyāptam. **diśāś ca sarvā** vyāptāḥ. **adbhutaṃ** adṛṣṭapūrvam tvadīyam **idaṃ ugraṃ** ghoram **rūpaṃ dṛṣṭvā lokatrayaṃ pravayathitaṃ** atibhītam. paśyāmīti pūrvasyaivānuṣaṅgaḥ //20//

実に、この天と地の間、即ち中間は、貴方一人によって満たされている。そして、一切の方角も満たされている。見られたことのない、即ち以前に見られていない、貴方のこの恐ろしい、即ち恐怖すべき姿を見て、三界は恐れている、即ち怖がっている。私は見る、という当に以前の [語] と結びつく。

kiṃ ca – amī hīti.

更に、実に、あの、と。

amī hi tvāṃ surasamghā viśanti kecid bhītāḥ prāñjalayo grṇanti /  
svastīty uktvā maharṣisiddhasamghāḥ stuvanti tvāṃ stutibhiḥ puṣkalābhiḥ  
//21//

実に、あの神の集合は貴方に入る。或る者達は恐れて、合掌して [称賛の言葉を] 述べる。「幸あれ」と述べて、偉大な聖仙と成就者の集合は、多くの讃歌によって貴方を讃える。

amī surasamghā bhītāḥ santāḥ tvāṃ viśanti śaraṇaṃ praviśanti. teṣāṃ madhye kecid atibhītā dūrata eva sthitvā kṛtasamputakarayugalāḥ<sup>57</sup> santo grṇanti "jaya jaya rakṣa rakṣa" iti prārthayante. spaṣṭam anyat //21//

あの神の集合は、恐れつつ、貴方に入る、即ち庇護所に入る。彼らの中で、或る者達は、非常に恐れて、遠方にのみ留まって、両手で合掌しつつ<sup>58</sup>、[称賛の言葉を] 述べる、即ち「勝利者よ、勝利者よ、[我らを] 護れ、[我らを] 護れ」と請願する。他 [の偈の言葉] は [意味は] 明瞭である。

kiṃ ca – rudreti.

更に、ルドラ [神群] と。

rudrādityā vasavo ye ca sādhyā viśve 'śvinau marutaś coṣmapās ca /  
gandharvayakṣāsurasiddhasamghā vīkṣante tvāṃ vismitās caiva sarve  
//22//

ルドラ [神群] とアーディティヤ [神群] と、ヴァス [神群] とサーディヤ [神群] と一切 [神群]、アシュヴィン [双神]、マルト [神群] と祖霊達と、ガンダルヴァとヤクシャとアスラと成就者の集合の当に一切は、驚いて貴方を見る。

**rudrās cādityās ca vasavaś ca ye ca sādhyā nāma devāḥ, viśvedevāḥ. aśvi-nau devau. maruto marudgaṇāḥ. uśmāṇaṃ pibantīty uśmapāḥ** pitarah. "uśma-bhāgā hi pitarah" (*Taittirīya Brāhmaṇa* 1.3.10) ityādiśruteḥ. smṛtiś ca "yāvad uśṇaṃ bhaved annaṃ yāvad aśnanti vāgyatāḥ / pitaras tāvad aśnanti yāvan noktā havirguṇāḥ //" (*Manu Smṛti* 3.227) iti. **gandharvās ca yakṣās cāsūrās** ca virocanādayaḥ, **siddhānāṃ saṃghās ca te sarva eva<sup>59</sup> vismitāḥ** santaḥ **tvām viḡsanta** ity anvayaḥ //22//

ルドラ〔神群〕とアーディティヤ〔神群〕とヴァス〔神群〕とサーディヤという名前の神群（devāḥ）である。一切神群と、アシュヴィン双神と、マルト〔神群〕、即ちマルトの群れである。湯気を飲むので、〔食物の〕湯気を吸引する者達（uśmapāḥ）、即ち祖霊達である。「というのは、祖霊達は湯気を分け前とする者達である」等という天啓聖典があるから。そして、〔以下のような〕伝承聖典がある。「食物が熱い限り、〔ブラーフマナ達が〕言葉を制御して食べている限り、供物の諸の属性が語られない限り、祖霊達は食べる」と。ガンダルヴァ達とヤクシャ達とアスラ達、即ちヴィローチャナ等であり、そして成就者達の群れ、それら他ならぬ一切は、驚いていて、貴方を見る、という〔語〕順である。

kiṃ ca – rūpaṃ iti.

更に、姿を、と。

rūpaṃ mahat te bahuvaktranetraṃ mahābāho bahubāhūrūpādamaḥ /  
bahūdaraṃ bahudamṣṭrākaraḥ lokāḥ pravyathitās tathāham //23//  
大きな腕を有する者（勇者、クリシュナ）よ、多くの口と眼、多くの腕と腿と脚を持ち、多くの腹を持ち、多くの牙（歯）によって恐ろしい、貴方の偉大な姿を見て、世間の人々は慄く。同様に私も〔慄く〕。

he mahābāho mahad atyūrjitaṃ tava rūpaṃ drṣṭvā lokāḥ sarve pravyathitā atibhītāḥ. **tathāham** ca pravyathito 'smi. kīdrśaṃ **rūpaṃ drṣṭvā. bahūni vaktrāṇi netrāṇi** ca yasmimś tat. **bahavo bāhava ūravaḥ pādās** ca yasmimś tat. **bahūni udarāṇi** yasmimś tat. **bahubhir damṣṭrābhiḥ karālaṃ** vikṛtaṃ raudraṃ ity arthaḥ //23//

おお、大きな腕を有する者（勇者）よ、偉大な、即ち非常に優れた貴方

の姿を見て、世間の人々の全ては慄く、即ち非常に恐れる。そして、同様に私も慄いている。どのような姿を見てか。多くの口と眼を持つ、その〔姿〕をである。多くの腕と腿と足とを持つ、その〔姿〕をである。多くの腹を持つ、その〔姿〕をである。多くの牙（齒）によって恐ろしい、即ち〔多くの牙が〕歪曲していて獐猛な〔姿を〕、という意味である。

na kevalam bhīto 'ham ity etāvad eva. api tu – nabhaḥspr̥ṣam iti.

単に、私は恐れる、というこの限りだけではない。むしろ、天に接す、と。

nabhaḥspr̥ṣam dīptam anekavarṇam vyāntānam dīptaviśālanetram /  
dr̥ṣtvā hi tvām pravayathitāntarātmā dhṛtiṃ na vindāmi śamaṃ ca viṣṇo  
//24//

実に、天に接し、輝き、多くの色を持ち、口を開き、輝く大きな眼を持つ貴方を見て、慄いた内的なアートマン（思考器官）を持つ〔私〕は、堅固さと平静とを見出さない。ヴィシュヌよ。

nabhaḥ spr̥ṣatīti **nabhaḥspr̥ṣk** tam, antarikṣavyāpinam ity arthaḥ. **dīptam** tejoyuktam. **aneka varṇā** yasya tam **anekavarṇam**. **vyāntāni** vivṛtāny **ānanāni** yasya tam. **dīptāni viśālāni netrāni** yasya tam. evambhūtam **tvām dr̥ṣtvā pravayathito 'ntarātmā** mano yasya so 'ham **dhṛtiṃ** dhairyam upaśamaṃ **ca na** labhe //24//

天に触れるので、天に接す者であり、彼を、ということであり、虚空に充満する者を、という意味である。輝いた、とは、威光と結びついた、ということである。多くの色を持つ、その多くの色を持つ者を、ということである。開いた、即ち閉じられていない諸の口を持つ、その〔貴方〕を、ということである。輝く大きな諸の眼を持つ、その〔貴方〕を、ということである。そのような者である貴方を見て、慄いた内的なアートマン、即ち思考器官を持つ、その私は、堅固さ、即ち堅固性と平静さとを見ない。

kiṃ ca – **daṃṣṭreti**.

更に、牙、と。

daṃṣṭrākarālāni ca te mukhāni dr̥ṣṭvaiva kālānalasaṃnibhāni /  
diśo na jāne na labhe ca śarma prasīda deveśa jagannivāsa //25//

そして、牙によって恐ろしい、時の火に似た貴方の諸の口を見て  
すぐ、私は方角も分からず、喜びも見出さない。慈悲深くあれ。

神々の支配者（ヴィシュヌ）よ。世界の住居（ヴィシュヌ）よ。

bho **deveśa**, tava **mukhāni dr̥ṣṭvā** bhayāveśena **diśo na** jānāmi. **śarma ca**  
sukham<sup>60</sup> **na labhe**. bho **jagannivāsa**, prasanno bhava. kīdr̥śāni **mukhāni**.

**daṃṣṭrābhiḥ karālāni kālānalaḥ** pralayāgnis tatsadr̥śāni //25//

おお、神々の支配者よ、貴方の諸の口を見て、恐怖に襲われて、方角も  
分からず、そして喜び、即ち快適さを見出さない。おお、世界の住居よ。  
慈悲深い者であれ。どのような諸の口を、か。諸の牙によって恐ろしい、  
時の火、即ち帰滅の火、それと似た [諸の口] を、である。

(未完)

## 参考文献一覧

### 一次文献

- BhG *Bhagavadgītā*: See BhGBh, GAD, Su<sub>A</sub>, Su<sub>B</sub>, Su<sub>w</sub>, Su<sub>s</sub>.  
BhGBh *Bhagavadgītābhāṣya* (Śaṅkara): *Śrīmadbhagavadgītā with Śaṅkara-  
rabhāṣya*. (Works of Śaṅkarācārya in Original Sanskrit Vol. II)  
Pūṇā: 1929 (5<sup>th</sup> Ed.: Vārāṇasī: Motilal Banarsidass, 2004).  
GAD *Gūḍhārthadīpikā* (Madhusūdana Sarasvatī): See Su<sub>w</sub>.  
Su *Subodhinī* (Śrīdhara Svāmin): See Su<sub>A</sub>, Su<sub>B</sub>, Su<sub>w</sub>, Su<sub>s</sub>.  
Su<sub>A</sub> *Vedavyāsapraṇītamahābhāratāntargatā Śrīmadbhagavadgītā:  
Śrīmadhusūdanasarasvatīviracitayā Gūḍhārthadīpikākhyayā  
vyākhyayā, tathā ŚrīdharasvāmiviracitaSubodhinyākhyayā  
vyākhyayā sametā*. Ed. Kāśīnātha Śāstrī. (Ānandāśrama Sanskrit  
Series 45) Pune: Ānandāśrama, 1901.  
Su<sub>B</sub> *Srīmad-Bhagavad-Geeta: Containing Eight Commentaries of  
Keshava Kashmiri Bhattacharya called Tattva-Prakashika*,

*Madhu-Soodan Sarasvati called Goodhartha-Deepika, Shankaranand called Tatparya-Bodhini, Shreedhara Swami called Subodhini, Sadanand called Bhawa-Prakasha, Dhanapati Soori called Bhaṣhyotkarsh-Deepika, Daivadnya Pandit Surya called Paramartha-Prapa, and Raghavendra called Artha-Samgraha Vol. 1-3.* Ed. Shastri Jeevarama Lallurama, Mahadeva Gangadhar Bhakre and Dinker Vishnu Gokhale. Bombay: The Gujarati Printing Press, 1912-1915.

- Su<sub>w</sub> *Srimadbhagavadgita with the Commentaries Śrīmadśāṅkarabhāṣya with Ānandagiri, Nīlakanthī, Bhāṣyotkarṣadīpikā of Dhanapati, Śrīdhārī, Gītārthasamgraha of Abhinavaguptācārya, and Gūḍhārthadīpikā of Madhusūdana with Gūḍhārthatattvāloka of Śrīdharmadattaśarmā (Bhachchāśramā).* Ed. Wāsudev Laxman Shāstrī Paṅṣīkar. Bombay: Nirṇaya Sāgar Press, 1936 (2<sup>nd</sup> Ed.).
- Sus *Śrīmad Bhagavad-Gītā: Text, Gloss, Translation of The Text and of The Gloss of Śrīdhara Swāmī.* Ed. and Tr. Swāmī Vireśvarānanda. Chennai: Sri Ramakrishna Math, 2008 (2<sup>nd</sup> Ed.).

## 二次文献

- Harimoto Kengo 張本研吾. 2006. "The Date of Śāṅkara: Between the Cāḷu-kyas and the Rāṣṭrakūṭas", *Journal of Indological Studies (New title for Studies in the History of Indian Thought)* 18, Kyoto University.
- Mayeda Sengaku 前田専学. 1980. 『ヴェーダーンタの哲学 —— シャンカラを中心として —— <サーラ叢書> 24』平楽寺書店.
- Ranjan, Neena. 2008. *Vishvarūpa: Paintings on the Cosmic Form of Krishna-Vāsudeva*, New Delhi, Aryan Books International.
- Sheridan, Daniel P., 1994. "Śrīdhara and His Commentary on The Bhāgavata Purāna", *Journal of Vaiṣṇava Studies* 2-3, Hampton, Deepak Heritage Books.
- Venkatkrishnan, Anand. 2015. *Mīmāṃsā, Vedānta, and the Bhakti Movement.* Columbia, Columbia University (Doctoral Thesis, Unpublished).

downloaded from:

<http://academiccommons.columbia.edu/catalog/ac%3A189616>.

Vireśvarānanda, Swāmī, ed. and trans. 2008. See Sus.

- 
- 1 年代に関して, Venkatkrishnan(2015) 参照.
  - 2 多面多臂であり, 世界をその身体とするという特徴については, 両方の要素を画像に反映させることもあれば, 一方の要素のみを画像に反映させることもある. 両方の要素を画像に反映させた作例としては, Ranjan(2008) 96などを参照. 一方の要素のみを画像に反映させた作例のうち, 多面多臂の作例としては Ranjan(2008) 113, 世界をその身体とする作例としては Ranjan(2008) 62などを参照.
  - 3 Ranjan(2008) 70などを参照.
  - 4 「ヴィシュヴァ・ルーパ」の画像の起源については, 瞑想の際に得た像であった可能性が考えられる.
  - 5 Ranjan(2008) 141.
  - 6 この節のシュリーダラ・スヴァーミンに関する記述は, 主に Sheridan(1994), Venkatkrishnan(2015) に依った.
  - 7 前田(1989) 21 に依る.
  - 8 Sheridan(1994), Venkatkrishnan(2015) 等.
  - 9 "The dissertation on Śrīdhara himself is still waiting to be written: Was he an abbot at a supposed Advaita monastery at Puri? Whom did he directly influenced and how? From where did his exegesis emerge in the first place, indebted to but detracting from Śaṅkara Advaita?" Venkatkrishnan(2015) 42,2-4.
  - 10 これらの点に関して, 筆者(眞鍋)は学会発表と論文発表を予定している.
  - 11 Harimoto(2006) に依る.
  - 12 Su の試訳にあたって, Vireśvarānanda(2008) を参考にした.
  - 13 BhG 10.42cd.
  - 14 abhinandann arjuna uvāca madanugrahāyeti caturbhiḥ Su<sub>A</sub>, Su<sub>B</sub>, Su<sub>W</sub>] abhinandan caturbhiḥ. arjuna uvāca madanugrahāyeti Su<sub>S</sub>.
  - 15 BhG 2.11ab.
  - 16 BhG 7.6cd.
  - 17 kamalapatre iva suprasanne viśāle akṣiṇī yasya tava saḥ, he kamalatrākṣa conj.] kamalapatre iva suprasanne viśāle akṣiṇī yasya tava he kamalatrākṣa Su<sub>A</sub>,

Su<sub>B</sub>, Su<sub>S</sub>; kamalapatre iva suprasanne viśāle akṣiṇī yasya saḥ, he kamalapatrākṣa Su<sub>w</sub>. Cf. BhGBh 160,12f.: kamalapatrākṣa kamalasya patraṃ kamalapatraṃ tadvad akṣiṇī yasya tava sa tvaṃ kamalapatrākṣo, he kamalapatrākṣa; GAD 467, 24f.: kamalasya patre iva dīrḡhe raktānte paramamanorame akṣiṇī yasya tava sa tvaṃ he kamalapatrākṣa.

18 sarvaniyanṭṛtve 'pi Su<sub>A</sub>, Su<sub>B</sub>, Su<sub>S</sub>] om. Su<sub>w</sub>.

19 om. Su<sub>w</sub>] ca Su<sub>A</sub>, Su<sub>B</sub>, Su<sub>S</sub>.

20 BhG 7.24ab.

21 BhG 9.4a.

22 BhG 9.9ab.

23 BhG 9.29a.

24 BhG 11.2a.

25 BhG 10.42c.

26 evam arjunam abhimukhīkaroti – śrībhagavān uvāca – paśyati caturbhiḥ Su<sub>B</sub>, Su<sub>w</sub>] evam arjunam abhimukhīkaroti caturbhiḥ. paśyati Su<sub>S</sub>; evam śrībhagavān uvāca – paśyati caturbhiḥ Su<sub>A</sub>.

27 aneke varṇā Su<sub>A</sub>, Su<sub>B</sub>, Su<sub>S</sub>] anekavarṇā Su<sub>w</sub>.

28 ca Su<sub>A</sub>, Su<sub>B</sub>, Su<sub>S</sub>] om. Su<sub>w</sub>.

29 Cf. BhGBh 161,17-19: yac cānyat jayaparājayādi, yat śānkase, "yad vā jayema yadi vā no jayeyur" (BhG 2.6b) iti yat avocaḥ, tad api draṣṭuṃ yadīcchasi.

30 BhG 11.4a.

31 saṃjaya uvāca Su<sub>A</sub>, Su<sub>B</sub>, Su<sub>w</sub>] om. Su<sub>S</sub>.

32 直訳は以下のものである。「神的な香油を有し」。

33 mālyāni ambarāṇi ca Su<sub>A</sub>, Su<sub>B</sub>] mālyāambarāṇi ca Su<sub>w</sub>, Su<sub>S</sub>.

34 dhārayatīti Su<sub>A</sub>, Su<sub>B</sub>, Su<sub>S</sub>] dhārayantīti Su<sub>w</sub>.

35 直訳は以下のものである。「油を有する」。油が神的な香りを持っているということである。

36 pūrveṇaivānvayaḥ Su<sub>A</sub>, Su<sub>S</sub>] pūrveṇānvayaḥ Su<sub>B</sub>, Su<sub>w</sub>.

37 原文は tadā であるが, tarhi と重複するため, 恐らくこのようなニュアンスであると推測して, この訳語を採用した。

38 BhG 11.9.

39 pṛthak pṛthag avasthitaṃ Su<sub>A</sub>, Su<sub>B</sub>, Su<sub>S</sub>] sthitaṃ Su<sub>w</sub>.

40 bhūtvābhāṣatoktavān Su<sub>A</sub>] bhūtvābhāṣata uktavān Su<sub>w</sub>, Su<sub>B</sub>, Su<sub>S</sub>.

41 teṣāṃ Su<sub>A</sub>, Su<sub>B</sub>, Su<sub>S</sub>] om. Su<sub>w</sub>.

42 devādīnām Su<sub>A</sub>, Su<sub>B</sub>] devānām Su<sub>w</sub>, Su<sub>S</sub>.

43 ca Su<sub>B</sub>, Su<sub>w</sub>, Su<sub>S</sub>] om. Su<sub>A</sub>.

44 merau Su<sub>A</sub>, Su<sub>w</sub>, Su<sub>S</sub>] mairau Su<sub>B</sub>.

45 viśvarūpa Su<sub>A</sub>, Su<sub>w</sub>, Su<sub>S</sub>] viśvarūpaṃ Su<sub>B</sub>.



- 46 Cf. GAD 474,29: he viśveśvara he viśvarūpa.  
47 tvāṃ Su<sub>A</sub>, Su<sub>B</sub>] om. Su<sub>W</sub>, Su<sub>S</sub>.  
48 kīrṭinaṃ Su<sub>A</sub>, Su<sub>B</sub>, Su<sub>W</sub>] kiroṭinaṃ Su<sub>S</sub>.  
49 ca Su<sub>A</sub>, Su<sub>B</sub>, Su<sub>S</sub>] om Su<sub>W</sub>.  
50 ca Su<sub>A</sub>, Su<sub>B</sub>, Su<sub>S</sub>] om Su<sub>W</sub>.  
51 śāśvatadharmagoptā Su<sub>A</sub>, Su<sub>B</sub>, Su<sub>W</sub>] śāśvata dharmagoptā Su<sub>S</sub>.  
52 prakṛṣṭa āśrayaḥ Su<sub>A</sub>, Su<sub>S</sub>] prakṛṣṭāśrayaḥ Su<sub>B</sub>, Su<sub>W</sub>.  
53 me mama mataḥ Su<sub>S</sub>] mama Su<sub>A</sub>; me mataḥ Su<sub>B</sub>, Su<sub>W</sub>.  
54 anantavīryam Su<sub>S</sub>] om. Su<sub>A</sub>, Su<sub>B</sub>, Su<sub>W</sub>.  
55 anantā Su<sub>W</sub>] anantā vīryavanto Su<sub>A</sub>, Su<sub>B</sub>, Su<sub>S</sub>.  
56 yasya Su<sub>A</sub>, Su<sub>S</sub>] yasya taṃ Su<sub>B</sub>, Su<sub>W</sub>.  
57 yugalāḥ *conj.*] yugulāḥ Su<sub>A</sub>, Su<sub>B</sub>, Su<sub>W</sub>, Su<sub>S</sub>.  
58 直訳は以下のものである。「合掌した一対の手を有しつつ」。  
59 sarva eva Su<sub>B</sub>, Su<sub>W</sub>] sarva eva hi Su<sub>A</sub>, Su<sub>S</sub>.  
60 śarma ca sukhaṃ Su<sub>A</sub>, Su<sub>B</sub>, Su<sub>W</sub>] śarma sukhaṃ ca Su<sub>S</sub>.